

ジェネラリストのための眼科診療ハンドブック

石岡みさき 著

本書を一読して、一貫してまったくブレていないと思った点があって、それは「著者の目線が一定」であるという点だった。著者自身が序文で、「専門外の疾患の相談は大学時代の同級生が一番良いと感じませんか？」と投げ掛けてもいるように、評者が本書から「一定した目線」を感じたのは、読んでいて常に非眼科医の先生と患者さんのことを意識した記述である印象を強く受けたからだ。どこを読んでも、である。

評者は500床以上の総合病院の総合内科に所属する医師である。その意味で、本書のタイトルにもある「ジェネラリスト」なのかもしれないが一般に総合内科医・総合診療医というのは、自分のことを「ジェネラリスト」と呼ぶのをはばかる。勘違いを生まないように言っておくと、読者対象は要するに「非眼科医」ということでよいと思う。「ジェネラリスト」である必要はないと感じた。

構成は、緊急度別、状況別、トピックス別などに分かれていて非常に実践的。薄い本であるのに幅広い。また実にプラクティカルであり臨床的である。例えば、点眼の仕方など、今さら教わることのない事項まで丁寧に記載されている（第12章）し、緑内障についての問いに答えた章（第13章）では、「処方しようとした内服薬が『緑内障禁忌』となっていますが、緑内障治療中の患者には使えないのでしょうか？」（p.124）というQuestionに対して気持ちのよい“快”答がなされていて、今まで何となくわかっていたようなことを明快に記載していただきとてもすっとした。

他に、個人的に確認できて有用だったことを項目だ

け挙げれば、電気性眼炎、抗がん剤の副作用、ミオキミア、あたり。特に抗がん剤は、古典的な抗がん剤のみならず、昨今汎用されるようになった分子標的薬に関連することにも記載があり、ミニマムのみを記載する実践本とも一線を画し、評者のような総合病院に勤務する医師にも通ずる網羅性を感じた。

読了後思ったのは、大学時代に習うべき眼科臨床を全て記述した本なのでは、ということ。評者はこの本を今後も繰り返し読み返すと思った。

一見悪く言うようだが、眼科医は非眼科医に冷たいことがある。「飛蚊症ごときで……症状もないのに目が真っ赤になったくらいで……」（以下省略）。おそらく本音は「眼科医じゃない医師に言ってもどうせわかってくれない」「とにかく忙しい」といったあたりではと推察するが、本書の筆致はとにかく優しい。最初に触れた、著者が想定したという「眼科医ではない同級生への目線で」というのは確かに本当であると思った。また患者さんへの説明の仕方についても随所に細かく書かれており、患者さんに優しい臨床家としての著者の姿を勝手に想像した。

本書は、「易しい眼科の本」ではなく「優しい眼科医の本」である。

国立国際医療研究センター病院総合診療科
國松淳和

A5・頁198 2015年12月
定価：本体3,400円＋税
[ISBN978-4-260-02418-1] 医学書院刊